

東京大学での所属学部/研究科・学年(プログラム開始時):教養学部 2 年

参加プログラム:IARU GSP, UCB1- Summer Peace Institute 派遣先大学:University of California, Berkeley

卒業・修了後の就職(希望)先: 3.公務員

派遣先大学の概要

このプログラムはアメリカ西海岸一の名門校、University of California, Berkeley のサマーキャンプであり、注意して欲しいことは実際には中米の国 Costa Rica にある国連平和大学(University for Peace)で授業が行われることです。

国連平和大学は1980年に国連総会決議により設立された大学院大学・研究機関で、国際的な平和構築や地域紛争の防止解決を行う専門的な人材養成を目的とします。キャンパスはコスタリカの首都サンホセの西 20km の Ciudad Colon という郊外の町にあります。

キャンパスの中に山があるなど敷地が膨大で、小さいながらも自然豊かで綺麗なキャンパスです。

今回の Summer Peace Institute の参加者は Berkeley の生徒30人、日本のほかデンマーク・シンガポール・オーストラリアの大学からの生徒で合計 10 人強、国連平和大学の修士の生徒 5 人、その他 3 人くらいでした。

参加した動機

もともとは 2 年生の夏から一年間の留学に行こうと思っていたのですが、そうすると進振りの関係で 2 年も休学しなければならないと分かったので、短期留学にとどめました。

もともと国連と日本をつなぐ仕事をしたいとの強い思いがあったので、国連平和大学というロケーションで勉強できること、さらには自分の最も興味ある分野である平和構築を勉強できると知り興味を引きました。

また、3 年生からは一年間の留学に行きたいと思っているので、その前哨戦として 6 週間という長さはちょうど海外の雰囲気味わうにも英語を伸ばすにも最適に思えたので、このプログラムに応募しました。

参加の準備

① プログラムの参加手続き(手続きにあたってのアドバイスなど)

私は余裕のない時期と重なってしまったため締切直前にあわてて書類を作って、ぎりぎりで駆け込んで出してしまいました。

本来はより余裕をもって応募理由などを推敲した後で出すべきだと思います。

② ビザの手続き(ビザの種類、申請先、手続きに要した時間、ビザ申請にあたってのアドバイスなど)

コスタリカのビザは必要ありませんが、アメリカでの乗り継ぎビザESTAは事前に申し込みました。

③ 医療関係の準備(出発前の健康診断、予防接種等)

特に何もしていませんが、念のため普段使う薬一式をもっていきました。

④ 保険関係の準備(加入した海外旅行傷害保険・留学保険等)

Berkeley で用意してくれる保険に加え、民間の保険(15000 円ほど)にも加入しました。

⑤ 留学にあたって東京大学の所属学部・研究科で行った手続きなど(履修・単位・試験・論文提出等に関して)

正式な手続きという形ではしていませんが、私の場合まだ 2 年生なのに 6 月～7 月という学期中にプログラムがあったこともあり、各授業の先生方に個人的に了承を得に行きました。

留学の趣旨を丁寧に説明したら先生方全員から了承を得られ、渡航直前にレポートを出したり、語学では教科書の一部を暗唱してくる宿題を出してもらうなどして、すべての教科でほとんど影響なく済みました。

⑥ 語学関係の準備(出発前の英語レベル・語学学習等)

参加前年の 11 月に事前準備なしで受けたTOEFLは84点。

それでは全然足りないと思ったので、このプログラムへの参加が決まったあとは、カジュアルな英語の練習のためにアメリカのドラマを観たり、英語の本を読んだりしていました。

それでも実際に行ってみると、自分の英語力のなさに愕然とさせられました。アカデミック英語もカジュアルな英語も、英語力が高いほど現地での生活が楽になると思うので、参加が決まったら最大限の準備をするべきだと思います。

⑦ 日本から持参した方がよいもの、その他出発前にやっておくべきこと・アドバイスなど

持参した方がいいものは、常備薬、普段使うスキンケア類の予備、日焼け止め数個(日差しは強く、特に後半のフィー

ルドワークではよく使う)、ジャージ類多数(後半フィールドワーク用)、普通の服(カジュアルな服しか持っていかなかったのですが、意外とお出かけ用の服も必要でした)、水着など。
また、何かの機会に使えるかと思ひ浴衣をもっていったのですが、ホームステイ先が一緒に仲良くなった人に Japanese dress と紹介して着付けして盛り上がりたりしたので、何か日本らしいものをもっていくとコミュニケーションの助けになるかも知れません。
せんべい・お茶なども持って行って、仲よくなった人に配ったりホームステイ先のお母さんにプレゼントしたりしたら結構喜ばれます。
また、コスタリカはスペイン語圏なので、スペイン語未習の私は現地の人とのコミュニケーションに困りました。そのためスペイン語を少しでも勉強しておくか、第二外国語でスペイン語既習の人が参加すると、英語のみならずスペイン語の練習にもなりいいと思います。

学習・研究について

①履修した授業科目のリスト(授業を履修した場合)

※そのうち、帰国後東京大学で単位認定の申請を行ったものに●をつけてください。

・Problems Without Passports: Human Security in the 21st Century

・Peacebuilding Practice

昨年の参加者からも、単位が認定される可能性はほぼないと聞いており、特に単位が必要とも感じなかったので申請自体しませんでした。

Berkeley からの参加者はこのプログラムで単位もとれるみたいなので、後述する Group Research Paper の際にはかなり点数を気にし神経質になっていました。

②プログラムの概要(授業・予習・復習のスタイル、印象に残っている内容等)

前半3週間と後半3週間では全く違うスタイル。

【前半:国連平和大学での座学】

10:00-12:00 大学で授業(おもに国連平和大学の教授が講師)

12:00-13:00 昼食

13:00-14:30 Group Discussion(授業に関連あるテーマで、10~15人ほどの規模で議論)

14:00-16:30 Group Research

Group Research は refugee, environmental issue, ethnic and religious discrimination など同じテーマに興味のあるメンバー5~7人ほどで、最後の Presentation と Group paper 製作に取り組む時間でした。

放課後は各人様々に過ごしていましたが、私は主に毎日課される膨大な量の Reading Assignment を読んだり5人のアメリカ人のハウスメイトと過ごし、たまに日本人メンバーとお喋りしたりもしていました。

【後半:Fieldwork】

08:00-12:00 Working

12:00-13:00 昼食

14:00-16:00 Activity

後半の Peacebuilding activity は、平和学の手法としてよく知られる、実際の fieldwork を通じて現実を感じるというもの。およそ5~8人ほどの班に分かれそれぞれがコスタリカ各地の団体に派遣されました。

移民への英語教育、women's shelter のお手伝い、地域の生涯教育センターでのボランティアなど様々ありましたが、スペイン語がかなり上手でないと選択肢はジャングルでの調査など言語を必要としないものに限られます。

私は山奥のジャングルに住む原住民の自治支援ボランティアに行きました。インターネットなどの通信手段もないので、アメリカ人3人、デンマーク人1人と私という5人のメンバーで24時間をともにし、最後に大学に戻っての Presentation と Group Paper 製作に取り組んだり、近くの川やサバンナに遊びに行ったりし、かなり仲よくなりました。Fieldwork の内容は班によってかなり違うみたいですが、私たちの場合は朝の4時間はジャングルの中に道を作るなどかなりの重労働でした。そして午後の Activity は原住民の言語や文化を勉強する内容のものが多かったです。

④学習・研究面でのアドバイス

前半の大学での勉強ですが、最初は英語力の足りなさから2時間も授業を聞くのも大変で、午後の Group Discussion や Group Research でもネイティブに混ざって発言することはかなり厳しかったです。それでもとりあえず参加しているんだという姿勢を見せ、付いていけなくなりそうだったら友達かTA、教授に早めに言って助けてもらうのがいいと思います。

基本的にノンネイティブのことは全く考慮に入れていないプログラムなので、助けが必要なら自分から行動を起こすしかありません。

⑤語学面での苦労・アドバイス等

最初はアメリカ人の5人のハウスメイトとの会話についていけず苦労しましたが、1週間後くらいからは何となく分かるようになり、仲よくなりました。帰国子女でもない限り慣れないうちはネイティブどうしの会話についていくのは精神的に大変だと思いますが、とにかく恥を捨てて積極的になるしかありません。

後半は初めはインターネットもない隔絶された環境を心配していましたが、むしろネイティブと24時間一緒に過ごせてかなり英語力が伸びました。フィールドワークから帰ってきたあと、ハウスメイトに英語上達したね!と言われたのがすごく嬉しかったです。

生活について

① 宿泊先(種類(寮・ホームステイ・ルームシェア等)、家賃、宿舎の様子、見つけた方法など)

前半三週間はホームステイで、英語が少しだけ分かる家族の家に Berkeley の生徒 5 人とともに住みました。留学生の女の子という配慮からか、広い部屋に大きいベッドに専用のバスルームもついた豪華な部屋を提供していただきました。ホームステイ先の家族は本当に優しく、部屋で勉強しているとフルーツをもってきてくれたり学校に行くときに弁当を作ってくれたりしました。

後半三週間はメンバー5人で共同生活でした。

② 生活環境(気候、大学周辺の様子、交通機関、食事、お金の管理方法(海外送金・クレジットカード)など)

常夏と聞いていましたが雨季なのもあり気温はそこまで高くはなく、朝夕は涼しいくらいでした。毎日スコールが降るので、傘やレインコートなどは必須です。

食事は前半は朝食と夕食はホームステイ先で作っていただき、昼食は学食でした。後半は三食とも原住民の団体の方に作っていただいていた。

交通機関は学校まではスクールバスが毎日送ってくれたので心配ありませんでした。

また、7万円分ほどをコスタリカの貨幣とドルで半分ずつ両替してもっていきましたが、途中で足りなくなったので VISA カードで ATM でお金をおろして使っていました。

③ 危機管理関係(留学先の治安、医療機関の事情、心身の健康管理で気をつけた点など)

コスタリカは中米では一番治安がいいですが、それでも夜は一人では歩かないように注意していました。

また、私もカメラを盗まれるなど、盗難は頻繁に起こっていました。

④ 要した費用とその内訳(航空賃、授業料、教科書代、家賃、食費、交通費、娯楽費などの概算)

航空賃 21 万

授業料 50 万

その他 約 15~20 万

週末の旅行代も含めると、全体ではかなりの金額になってしまいます。余裕をもって 100 万弱くらい見積もった方がいいと思います。

⑤ 奨学金(受給していた場合は、支給機関・支給額・見つけた方法など)

奨学金支給団体: JASSO (日本学生支援機構)

金額: 12 万円 (月額 6 万円×2 月分)

奨学金支給団体: Santander

金額: 119,600 円

大学を通じて。その他私は申請時期を逃してしまいましたが、Friends of Todai の奨学金もチェックするといいと思います。

⑥ 学習・研究以外の活動(スポーツ・文化活動、ボランティア・インターン、週末の過ごし方など)

週末は毎週コスタリカの各地に旅行に行っていました。

一週目: ポアス火山、マヌエル・アントニオ国立公園とビーチ

二週目: イリス火山とフォルトウナの温泉リゾート、滝、zip lining

三週目: water rafting

四週目: Uvita というビーチタウンでのんびり

五週目: 田舎の温泉でゆっくり

派遣先大学の環境について

① 参加学生へのサポート体制(語学面・学習面・生活面・精神面でのサポート等)

ノンネイティブに対する英語面でのサポートはほぼないと言って過言ではありません。自分で個人的にネイティブの友人や TA、教授にサポートを頼む精神力はないときついでしょう。

学習面では TA さんや教授に聞けば親切に答えてくれます。

② 大学の設備(図書館・スポーツ施設・食堂・PC 環境等)

平和学についての本がたくさんある図書館がありました。PC や wifi 環境は良かったです。食堂も毎食コスタリカの違った料理が出て、個人的にはとても気に入りました。またサッカー場があり休み時間にサッカーをしている人もいました。

プログラムを振り返って

① プログラムの意義、参加を通じて成長したこと、その他留学を通じての所感

とにかく精神的にも身体的にもタフなプログラムでした。これまで出会ったことのない様々な価値観に触れることが出来ましたし、20 歳になるという人生の区切りでとてもいい経験が出来たのではないかと思います。

② 参加後の予定

さらに自分の興味ある分野について勉強し、英語力も向上させるため、来年から一年間留学に行こうと考えています。

③ 今後参加を考えている学生へのメッセージ・アドバイス

このプログラムは出来れば英語がかなり得意で、スペイン語の素養も少しはある人が望ましいのではないかと思います。そうでなくてももし興味をもったなら是非チャレンジしてみてください。きっと予想以上のものが得られる6週間になるのではないかと思います。

その他

① 準備段階や留学中に役に立ったウェブサイト・出版物

Today go global のホームページ

地球の歩き方

② その他東京大学のホームページ・出版物等に掲載してよい留学中の写真があれば添付してください。



東京大学での所属学部/研究科・学年(プログラム開始時):工学系研究科 修士 1 年

参加プログラム: IARU GSP

派遣先大学: UCB

卒業・修了後の就職(希望)先: 1.研究職 2.専門職(医師・法曹・会計士等) 3.公務員 4.非営利団体

5.民間企業(業界:) 6.起業 7.その他()

派遣先大学の概要

プログラムはカリフォルニア大学バークレー校が考案したものだが、プログラム前半は中米コスタリカ、シウダーコロンにある国連平和大学(UPEACE)にて実施される。UPEACE は Graduate School であるため、学生は修士以上の者しかおらず、大学の規模としては小さいが、自然あふれる素晴らしい環境に囲まれている。日本人の学生も所属しており、私が訪れたときは 2 名の日本人学生がいた。

大学には小さめの食堂があり、ランチは 2500 コロン(約 500 円)で食べる事ができる。また、図書館や保健センターもあり、コンピュータも常に使えた。

大学自体はシウダーコロンの中心部からバスで 15 分程山を登った所にあり、毎日、スクールバスに乗って大学へ登校した。

参加した動機

きっかけとなったのは 2 年前の東日本大震災で被災したことである。2 年前の災害を生で体験した経験は人生の価値観を変えるほどの影響を私に与えた。私は航空宇宙工学専攻であり PACS とは全く異なる分野の研究をしているが、この経験をどうにか活かしたいと思い、このプログラムに参加した。

また、このプログラムに参加することで、世界中に友人を作りたいかった。実際、生徒の 80%はカリフォルニア大学バークレー校の生徒であり、IARU GSP というよりは University of California, Berkley が主催するプログラムのおまけのような存在であったが、コペンハーゲン、シンガポール、レバノン、オーストラリア、アメリカなど各国に友人ができた。

参加の準備

①プログラムの参加手続き(手続きにあたってのアドバイスなど)

このプログラムは語学留学ではなく、基本的に Native レベルで英語が話せる者が対象である。このプログラムの TOEFL の点数は 80 点以上が条件であったが、他の生徒と対等に渡り合いたいならば、100 点以上は必須。

また、授業料が高額であり、コスタリカへの渡航費も高額であるため、奨学金を申請することをおすすめする。奨学金の申請にあたっては、指導教官の推薦書等が必要となるため、準備に時間をとられる。書類の締切は 2 月末だったので、私は 1 ヶ月半程前から準備を進めた。

②ビザの手続き(ビザの種類、申請先、手続きに要した時間、ビザ申請にあたってのアドバイスなど)

コスタリカは 90 日間以内の滞在ならばビザは必要ない。

③医療関係の準備(出発前の健康診断、予防接種等)

虫除けスプレーおよびムヒは必須である。特に後半の Field Work では毎日が蚊との戦いであり、虫除けスプレーをしていないと大量の虫刺されによって苦勞することになる。また、基本的に水は飲めるが、人によっては胃を下したりすることもあるので、胃薬も必須である。

④保険関係の準備(加入した海外旅行傷害保険・留学保険等)

航空券とセットで海外旅行保険に加入した。Berkley の生徒向けの保険にも加入することになる。

⑤留学にあたって東京大学の所属学部・研究科で行った手続きなど(履修・単位・試験・論文提出等に関して)

海外の大学は基本的に夏休みであったが、日本の大学は授業期間中であったため、このプログラムに参加するためには講義を欠席しなければならなかった。したがって、受講している講義の教授に事前に留学することを伝え、留学による欠席分を代替レポートなどで補った。さらに、留学後の試験やレポートをきちんと提出できるように多くの友人に講義の情報をメールで送ってもらうように頼み、帰国後に遅れを取らないようにした。

⑥語学関係の準備(出発前の英語レベル・語学学習等)

TOEFL 84 点。出国前に 1 ヶ月半は、毎日 30 分から 1 時間程 Rarejob を使って英会話の練習をしていた。この点数では、講義、議論等に全く付いて行く事ができず、英語面では非常に苦勞した。もちろん、このプログラムを通して多くの貴重な知見を得たが、英語レベルがもっと上ならば、さらに多くの知見を得られた事は間違いない。

コスタリカはスペイン語圏であり、スペイン語の簡単な会話ができないと現地の人とコミュニケーションを取るのは難しい。私は簡単な会話帳を持参して行った。

⑦日本から持参した方がよいもの、その他出発前にやっておくべきこと・アドバイスなど

+ノートパソコンは Group Work 時に必須。Google Doc をよく使うので、Gmail アカウントを持っておいの方が良い。

+毎日雨が降るので折り畳み傘も必要。

+ 普段、勉強している分野とは全く異なる分野であったため、出発前に平和構築に関する書籍を何冊か読んだ。

学習・研究について

①履修した授業科目のリスト(授業を履修した場合)

※そのうち、帰国後東京大学で単位認定の申請を行ったものに●をつけてください。

Problems Without Passports (4 credits)

Peace-building Practice (3 credits)

②プログラムの概要(授業・予習・復習のスタイル、印象に残っている内容等)

前半の 3 週間はシウダーコロンの国連平和大学(UPEACE)にてプログラムが実施される。1 日の基本的なスケジュールは以下の通り。

AM 9:25 - : スクールバスに乗る

AM 10:00 – 12:00: Lecture

PM 1:30 – 2:30: Discussion

PM 2:30 – 3:30: Group work

PM 4:30 - : スクールバス

(PM 5:00 – 7:00: Spanish)※

※第 2 週目から放課後週 2 回、合計 4 回のスペイン語会話教室に参加できる。(40 ドル)

Lecture の内容は平和構築、国際法、環境問題など、いわゆる PACS(Peace-building and Conflicts)という分野である。事前に Reading の課題が与えられ、Lecture ではそれに関連した内容を扱う。与えられる Reading の量は非常に多く、全てこなすのは Native でさえ時間的に厳しい。実際、Reading をやっていないからといって Lecture についていけない訳ではないので、Lecture の内容を理解できれば問題ない。講義は分野別に複数の教授がオムニバス形式で行う。

Discussion では、講義の内容に関して 10 人程度のグループに分かれて議論を行う。各グループには TA が 1 人付き、議論は TA が仕切る。議論の進め方は TA によって微妙に異なり、進行の上手い TA もいればそうでない TA もいた。日本とは異なり、議論ではどんどん手が挙がり、集中していないと完全に置いて行かれてしまう。

Group Work では 6 人程度の Group に分かれて、各グループ 1 つのテーマを取り扱う。テーマとしては環境問題、男女差別、民族紛争など様々であった。内容としては、与えられたテーマに関して調査、議論を行い、25 ページ程の Group Paper を作成し、最後に他の学生の前で Presentation を行う。最終的に、この Group Work にほとんどの時間を費やすことになる。多国籍なメンバーになると各国の Group Work の取り組み方の違いによって、メンバー間で衝突が起こることが度々ある。特に私のグループではその傾向が強く、後半になるに連れメンバーのいらだちが非常に目立った。

また、このプログラム前半は PACS に関する背景知識がないと非常に厳しい。私は工学系研究科に所属しているため、前半は Lecture、Discussion、Group Work、全てにおいて非常に辛かった。(ちなみに生徒のほとんどは文系であり、理系は私だけであった。)

プログラム後半の 2 週間半はコスタリカ各地に分散して Field Work を行う。Field Work の内容は、スラムの子供達に英語を教える、ダンスを教える、ボランティアとしてコスタリカ各地の施設(Trimbená, ASOMOBÍ, ASOPRORA, Kekoldi etc)で働くなど様々である。グループの人数は 4 人から 9 人であった。

私は Kekoldi というパナマとの国境付近のジャングルのど真ん中で働いた。メンバーは 6 人。1 日の基本的なスケジュールは以下の通り。

AM 7:00 – 7:30: Breakfast

AM 8:30 – 11:30: トレイル整備、カエルの生態調査、バードウォッチングタワー整備など基本的に肉体労働

Lunch

PM 13:00 – 19:00: ハンモック作り、ブレスレット作り、チョコレート作りなどを通して現地文化を学ぶ

Dinner & Free time

PM 10:00- :就寝

施設の場所が熱帯雨林地帯の山間部に位置し、かつ雨期であったため基本的に地面は泥だらけで非常に滑り易い。したがって、外を歩くときは長靴が必須である。現地で購入できる。また、Wi-Fi が使えないため外界との連絡をとることがほとんどできない。週末になると山を下りて、Wi-Fi が使える近くのビーチに行き、外界と連絡を取った。さらに電気が使える時間も午後 6 時から午後 10 時までと限られており、日本では考えられないような生活を送った。ちなみに、お湯も使えない。

午前中の肉体労働はなかなか大変で、いつもくたくたになるまで働いた。カエルの生態調査はトレイルを 2 時間ほど歩き回って、3 種類のカエルの数を数えるだけだが、険しい山道を歩くだけでも体力を奪われた。しかしながら、ジャングルを歩くと新しい発見があり、日々自然の素晴らしさに感動していた。人生に 1 度は体験すべきだと思う。

午後は基本的にフリータイムで、ハンモックを作ったり、ブレスレットを作ったり、各自が自分のやりたいことを好きなように行った。ゆっくりと時が流れるこの時間が、私は 1 番好きだった。施設自体もそこまで大きくはないので、常に目の届く範囲にメンバーがいて、お互いの文化の違いなど様々なことを話した。

仕事は大変だったが、その分メンバー間の絆は日々強くなっていった。幸運なことに、私はメンバーに非常に恵まれた。グループによっては不満がたまり、喧嘩が頻発するところもあった様だが、私のグループではそういった事は全くなかった。2 週間半、寝食を共にし、辛い体験、楽しい体験、全てを共有した私たちは最終的に家族のような関係になった。

Field Work の評価は Group Paper と Presentation で決まる。Group Paper は 15 ページ程で良いため、前半ほど大変なものではなかった。Presentation に関しても同様であった。

④学習・研究面でのアドバイス

前半 3 週間は大量の Reading 課題が毎日出されるが、全て読んでいる生徒はほとんどいなかった。後半になるに連れて、Group Work にかかる時間が多くなり、Lecture や Discussion をさぼって、Group Work に集中する生徒もいた。ちなみに週末は基本的に Activity で埋まるので、基本的に休む暇はないと思った方がよい。

⑤語学面での苦労・アドバイス等

TOEFL 84 点では、英語での Discussion や Group work に全く付いて行く事ができない。だからと言って、あきらめても意味がないので、私は利用できるものは全て利用した。Discussion では、TA をお願いして事前に議論の進行をホワイトボードに書いてもらい、それを見て自分の意見を作成した。TA も Discussion が白熱する前の私が理解できている段階で、意見を言うように気を遣ってくれた。これによって、各回最低 1 回は発言することができたが、自分の考えを正確に伝えるには不十分であった。

Group Work では英語力不足に知識不足も加わり、全く貢献することができず、非常に悔しい思いをした。

もちろん、このプログラムを通して多くの貴重な知見を得たが、英語レベルがもっと上ならば、さらに多くの知見を得られた事は間違いない。

生活について

①宿泊先(種類(寮・ホームステイ・ルームシェア等)、家賃、宿舎の様子、見つけた方法など)

基本的にホームステイ。私の場合、2 人のルームメイトと一緒に住んでいた。Housing は出国直前に送られて来た。難点としては、シウダーコロンには番地というものがなく基本的に「〇〇から東に〇m 進んだ黄色の家」といった住所の表し方をするので、探すのは大変だった。基本的にタクシードライバーに頼んで、ホームステイ先に電話してもらうのが 1 番早い。

Wi-Fi が使えたのでインターネット関連で困る事は特になかった。

②生活環境(気候、大学周辺の様子、交通機関、食事、お金の管理方法(海外送金・クレジットカード)など)

@シウダーコロン

+ 6,7 月は雨期なので、基本的に午前中は晴れ、午後は雨。シウダーコロンならば、基本的に半袖、短パン、サンダルで過ごせる。交通機関は基本的にバスかタクシー。タクシーはスペイン語ができる人と乗った方がよい。

+ 食事は基本的に朝、晩はホームステイ先、昼は大学。主食がライスなので、お米が恋しくなることは全くなかった。フルーツが充実しており、シウダーコロン中心部には安くて美味しいスムージーを飲めるお店があった。

+ 大きなスーパーマーケットがあるので、生活物資に困る事はない。

+ お金はクレジットカードと現金。平日はランチ代くらいしかからないが、週末の Activity ではコスタリカの観光名所(国立公園、火山、ビーチなどなど)を訪れるため、お金がかかる。これによって私は最終的に資金不足になり、帰国直前の口座残高も含めて全額 90 ドルしかなかったため、お金を友人から借りることになってしまった。

@Field Work

+ 気候は湿度が非常に高く、蒸し暑い。

+ 私の場合、汚れても良い長袖、長ズボンが必要と言われたので、Field Work に行く前日にメンバーと服を買いに行った。

+ 交通機関はなく、どこへ行くにも基本的に 30 分以上、長靴を履いて山道を歩かねばならない。

③危機管理関係(留学先の治安、医療機関の事情、心身の健康管理で気をつけた点など)

シウダーコロンはコスタリカで最も安全な町として有名であり、実際特に危険を感じたことはなかった。それでも深夜は危険であるため、特に女性は歩かないようにと大学側のスタッフから何度も言われた。

④要した費用とその内訳(航空賃、授業料、教科書代、家賃、食費、交通費、娯楽費などの概算)

航空賃: 約 20 万円

授業料: 約 40 万円

娯楽費: 約 5 万円(海外の学生はよく学び、よく遊ぶ人が多いため、毎週末、旅行に行っていた。)

⑤奨学金(受給していた場合は、支給機関・支給額・見つけた方法など)

Friends of TODAI: \$3,000

JASSO: 12 万円

⑥学習・研究以外の活動(スポーツ・文化活動、ボランティア・インターン、週末の過ごし方など)

アメリカの学生は "Work hard, play hard." を絵に描いたように、よく学びよく遊ぶ。金曜の夜は必ずバーやクラブに行き、週末になるとコスタリカの観光名所に出かけた。生徒全員で出かける事もあれば、レンタカーを借りて仲の良いメンバーと旅行したりもした。どこにも行かなかった週末はない。その結果、当初予定していたよりもはるかに多くのお金を使ってしまう、コスタリカ出国時は口座も含めて、90 ドルしかなく、東京に帰れるか心配になった。

時間があるときは昼休みにサッカーをよくした。スポーツに言葉はいらない、必要なのは気持ちだけ。

派遣先大学の環境について

①参加学生へのサポート体制(語学面・学習面・生活面・精神面でのサポート等)

参加学生へのサポート体制が充実していたとは言えない。重要な連絡でさえいつも直前になってから知らされ、あたふたすることが多かった。

②大学の設備(図書館・スポーツ施設・食堂・PC 環境等)

小さな図書館、ちょっとしたサッカー場、食堂兼カフェ、PC は常に使える。食堂のランチはいつも\$5。

プログラムを振り返って

①プログラムの意義、参加を通じて成長したこと、その他留学を通じての所感

このプログラムは PACS という分野であり、はっきり言って理系学生が参加すべきプログラムではないと思う。実際、参加者は私以外は文系の生徒であり、初日の自己紹介で”Space engineering”と言ったら周囲が驚いていた。

プログラム前半では、Discussion や Group Work に付いて行く事ができず、自分がいかに無力かを痛感した。例え、どんなに良い考えを持っていたとしても、「英語」という言語の壁を破らない限りは世界の舞台では全く意味をなさない。また、自分の意見を言うことの大切さを学んだ。日本だと横柄に思われるくらい自分の意見をはっきり言わないと、海外では存在しないに等しい。ただ黙って座っているだけでは、いないのと同じようなものだと感じた。

また、年齢層の幅広さにも驚いた。私が知っている限りで、最年少は 19 歳、最年長は 35 歳(娘 1 人)であり、私は若い方だった。日本とは異なり、アメリカの学生は一度働いてお金を貯めてから、大学に入学するなど、人生経験が多岐にわたっていて非常に興味深かった。「人生何とかなる」と実感した。

プログラム後半では、東京の喧騒とは正反対のスローライフを通して、自然の素晴らしさや現地の人の温かさに触れた。そして、何よりも仲間に恵まれた。私達のグループの絆は本当に家族のようなものだと感じている。だから、別れる時は本当に辛かった。なぜなら、日本とは違い、世界に点在する家族と再会することはそう簡単なことではない。しかし、私は彼らに再会するためにベストを尽くしたいと思う。

②参加後の予定

アメリカの大学院への進学を考えている。今回の留学を通して、アメリカの学生と同じ立場で戦い、そして勝ち残りたいと強く感じた。仮に、大学院に進学できなかった場合は就職して、お金を貯めてからまた再チャレンジしようと思う。人生何とかなる。

③今後参加を考えている学生へのメッセージ・アドバイス

英語力が高い方が「学問」的な意味では得るものは多いのは間違いない。しかし、「人生」的な意味で得られる経験は英語力とは関係ない。今回の経験は、私の今後の人生で絶対に役立つと確信している。もし、英語が不安で参加しようかどうか迷っているならば、参加すべきだと思う。辛い経験は覚悟しなければならないが、それを通して得られるものは必ずある。

その他

①準備段階や留学中に役に立ったウェブサイト・出版物

Google Scholar で論文検索に慣れておくと良い。また、Prezi というプレゼンテーションソフトを使い慣れておくと Group Presentation で役に立てる。

②その他東京大学のホームページ・出版物等に掲載してよい留学中の写真があれば添付してください。



東京大学での所属学部/研究科・学年(プログラム開始時): 法学部第二類(公法コース)3 年

参加プログラム: UCB1:Summer Peace Institute

派遣先大学: UC バークレー/国連平和大学(コスタリカ)

卒業・修了後の就職(希望)先: 1.研究職 2.専門職(医師・法曹・会計士等) 3.公務員 4.非営利団体

5.民間企業(業界:未定) 6.起業 7.その他()

派遣先大学の概要

本プログラムは、カリフォルニア大学バークレー校 University of California, Berkeley (UCB) 主催だが、派遣先はコスタリカの国連平和大学 United Nations Mandated University for Peace (UPEACE) である。

主に UCB 学内の平和学 Peace and Conflict Studies (PACS) 専攻の学生が多く、その他数人の UCB の学生、他のアメリカの大学の学生、東京大学、シンガポール、オーストラリア、デンマークなどの国のからの留学生数人が参加していた。ネイティブが圧倒的に多く、留学生もネイティブか英語レベルが比較的高い学生が多かった。また、特に留学生向けにデザインされたプログラムではなく、英語は流暢なのが前提となっているため、講義/ディスカッション/課題のレベルは優秀なネイティブ学生向けとなっている。

本プログラムは大きく二つに分かれていた。

前半3週間は、国連平和大学にて「人間の安全保障と平和構築 Human Security and Peacebuilding」を題材にした講義/ディスカッション/グループプロジェクト(論文と発表)をした。

後半2週間半は、4-8 人のグループごとに Ecotourism 関連の現地の NGO に派遣され、フィールドワークを経験しつつ、その経験と前半の学習内容を踏まえたグループプロジェクトに取り組んだ。

参加した動機

大学生活中に留学をしたかったという漠然とした理由に加え、将来のキャリアとしての国際協力という選択肢と、そのための海外大学院進学について真剣に考えるきっかけとして、本プログラムは最適だと思った。その理由は、主に下記の3つである。

1. 国際協力との深い関連性: 本プログラムを通して、「人間の安全保障と平和構築 Human Security and Peacebuilding」について学習する機会、フィールドワークにて体験する機会、そして国連平和大学で学ぶ機会は、国際協力分野に進む上での海外大学院進学、職業と自分との適性を確認するのに適していると思った。

2. 海外での学習環境: アメリカの一流大学での学習環境、周りの学生のレベルなどを把握して、私自身がアメリカの大学院に進学したいか否か判断するきっかけにしたかった。

3. 経験: 留学をしたいと思ってはいたが、語学向上のための留学ではなく、海外の学生と彼らにとっての普段の学習レベルがどの程度のものか自ら体験しつつ、交流や議論、共同生活を通して刺激を受けたかった。そのため、English as Second Language (ESL)の学生や留学生向けのプログラムではなく、UCB の学生向けの派遣プログラムである本プログラムは、その目的に合っているように感じられた。また、期間が IARU GSP プログラムの中でも最長であることも、留学での経験の醍醐味を得られる機会として魅力的だと思った。

参加の準備

①プログラムの参加手続き(手続きにあたってのアドバイスなど)

そもそもの応募の際は、本プログラム応募手続きと並行して他の春休みの予定の応募手続きもあったことや、試験期間中であつたこともあり、複数の手続きと試験勉強の両立が難しかった。

また、渡航決定後も、奨学金手続きの時期のバラツキや、UCB および国連平和大学の連絡や事務手続きの非効率性のため、何度も問い合わせをする必要があり、苦労した。

②ビザの手続き(ビザの種類、申請先、手続きに要した時間、ビザ申請にあたってのアドバイスなど)

ビザは不要。アメリカ経由でコスタリカに渡航したため、ESTA をネット上で申請したが、要した時間は 5 分程度だった。

③医療関係の準備(出発前の健康診断、予防接種等)

健康診断は事前に受ける手続きをした。予防接種等は、以前海外に住んでいた際に受けていたので、今回は特に必要なかった。

④保険関係の準備(加入した海外旅行傷害保険・留学保険等)

UCB の本プログラムに含まれる保険に加入。その他は、以前海外に住んでいた時に登録した親の勤め先である会社の保険があつたので、特に新しい保険への加入はしなかった。

⑤留学にあたって東京大学の所属学部・研究科で行った手続きなど(履修・単位・試験・論文提出等に関して)

応募の際、参加決定後、渡航前手続きそれぞれにおいて簡易手続きがあつた。法学部は期末試験が 9 月にある上、留学を考慮して履修科目も出席不要の科目を登録していたため、法学部の単位に関しては支障なし。ただ、3 週間で

上の留学の場合、留学プログラムでの単位か法学部の単位かどちらかを選択しなければならないため、法学部の単位を優先することにした。

⑥語学関係の準備(出発前の英語レベル・語学学習等)

TOEFL ibt 112 点。スペイン語初級レベルだったが、もう少しスペイン語ができたならより充実した経験ができたと思われる。

⑦日本から持参した方がよいもの、その他出発前にやっておくべきこと・アドバイスなど

パソコン。フィールドワーク用の汚れても良い服装。雨季なので、折りたたみ傘があると便利。水着など、現地で週末に旅行する時用の持ち物。だいたい日用品は現地で調達可能。

学習・研究について

①履修した授業科目のリスト(授業を履修した場合)

※そのうち、帰国後東京大学で単位認定の申請を行ったものに●をつけてください。

PACS 119: Problems without Passports: Human Security Issues in the 21st Century

PACS 135: Peacebuilding Practice: Fieldwork in Costa Rica

②プログラムの概要(授業・予習・復習のスタイル、印象に残っている内容等)

前半: PACS 119: Problems without Passports: Human Security Issues in the 21st Century

毎日予習範囲の関連論文や記事のリーディング 100 ページ程度に基づいた講義 2 時間、ディスカッション 1 時間、1 週目の終わりからはグループプロジェクト(グループペーパー20 ページおよびグループプレゼンテーション1 時間)1 時間~という構成だった。グループプロジェクトは進歩によって放課後 1 時間のみで後は分業して各自取り組むグループもあれば、放課後学校に残ったり誰かの家に集まったりして一緒に取り組むグループもあった。

人によっては一週間に一度2時間のスペイン語の授業を選択して、放課後受講していたが、これに関してはプログラムとは直接関連はない。

予習のリーディング 100 ページ程度は、目を通して概要を把握する程度でよかったうえ、翌日の講義でだいたい同じことを話すので、そこまでの負担ではなかった。とはいえ、グループプロジェクトの課題で、予習をどれだけ真面目にしていたか否かによって取り組みやすさに差が生まれたことは否めない。

講義は座学で、予習範囲の論文の内容とかなりかぶっているもので、退屈に感じられることがしばしばであった。

ディスカッションは、1グループあたり 15 人前後で、それぞれのグループに国連平和大学の院生講師 Graduate Student Instructor (GSI)がファシリテーターとしてつくこととなっていた。大規模なグループだったため、だいたい 1 時間に 3 度程度しか発言しなかった。

グループプロジェクトは、学生の間で意見が割れることや、事前知識や英語力の差による困難を乗り越える経験が印象に残っている。難しくはあったが、話し合っグループプロジェクトに取り組み、お互いにアドバイスやフィードバックを与え合いつつ課題に取り組むこの経験が、学習面では一番私にとってためになったと思う。

後半: PACS 135: Peacebuilding Practice: Fieldwork in Costa Rica

後半は、4~8 人程度に分かれ、それぞれ違ったフィールドワークプログラムに参加していた。プログラム選択の際の情報伝達があまりにずさんであったため、ほとんど運でフィールドワークプログラムが決まってしまったと言っても過言ではない。

私が参加していたのは、Ecotourism や環境保全、科学的研究、環境教育を実施している NGO のボランティアプログラムで、熱帯雨林での活動だった。ただ、派遣先によってプログラムの内容や生活環境はかなり差がある。私たちのプログラムはかなり観光ボランティアの側面が強く、地域に貢献するというよりは私たち自身が経験を通して学んだり楽しんだりする、というものだった。そのため、正直、自らの活動と人間の安全保障や平和構築との関連性を肌で感じることは少なかった。

とはいえ、私のグループは少人数で、4 人しかおらず、そのうちの私以外 3 人がかなり優秀なネイティブだったため、グループワーク(グループペーパー12 ページとグループプレゼンテーション1 時間)に取り組む時の切磋琢磨した経験が学びになったと感じられた。1/4 のグループワークの責任が与えられ、グループプレゼンテーション当日に1人体調不良による欠席により、1 時間のプレゼンテーションの 1/3 を担う経験も、ためになったと感じられる。

④学習・研究面でのアドバイス

グループ課題に取り組む際は、周りとのコミュニケーションを重視して、アドバイスやフィードバックを出来るだけお互いに与え合うことが本留学プログラムの醍醐味だと思う。

⑤語学面での苦労・アドバイス等

主にグループペーパーについて:

Writing の際、前半も後半も周りのネイティブよりも書くのに多少時間がかかってしまったように感じられた。また、グループワークなので、他のメンバーが自分の書いた section の添削をしてくれるため、そこから Writing techniques を学ぶためにも、出来るだけ早く First draft は書き上げた方がよいと思う。とはいえ、グループ内での一貫性やメンバー間での繰り返しも多々見られるので、自分の書く内容をあらかじめかなり綿密に把握してから書き始めないと、かなり大部分を消されてしまったり、変更されてしまったりする。

生活について

①宿泊先(種類(寮・ホームステイ・ルームシェア等)、家賃、宿舎の様子、見つけた方法など) 人によってそれぞれだが、私の宿泊先は前半も後半もかなり快適だった。コスタリカの日常生活に多少ながら触れられたと感じた。 納得いかないことがあれば、Host mother やプログラムのロジスティクス担当者に相談することが重要。 ②生活環境(気候、大学周辺の様子、交通機関、食事、お金の管理方法(海外送金・クレジットカード)など) 雨がよく降る。日本の梅雨よりは暖かめだが、日本の真夏よりは涼しい。 お金は、米ドルが基本的に使えるが、おつりはコロンで渡される。アメリカ人はクレジットカードを遣う人が多かった。 交通機関は日本ほど整備されていないので、旅行に行く際の交通費はかなり負担になった。 ③危機管理関係(留学先の治安、医療機関の事情、心身の健康管理で気をつけた点など) 治安は日本ほどよくはないが、身の危険を感じることはなかった。とはいえ、旅行先や渡航先で、電子機器を盗まれた友人が数名いたのも事実。 途中少し体調を崩す人は多かった。感染症等ではないが、生活の変化による疲れや気候への対応、食生活などが主な原因だったように感じられる。医療機関のアクセスはあまり良くないと思う。 ④要した費用とその内訳(航空賃、授業料、教科書代、家賃、食費、交通費、娯楽費などの概算) 航空費 20 万 授業料、教科書代、家賃、食費(朝・夜)、スクールバス 50 万 娯楽費 8 万程度 ⑤奨学金(受給していた場合は、支給機関・支給額・見つけた方法など) 東大の超短期海外留学奨学金 8 万円 (2013 年 7 月現在申請中) Santander 12 万円 ⑥学習・研究以外の活動(スポーツ・文化活動、ボランティア・インターン、週末の過ごし方など) 放課後は、課題の進捗状況によってはホームステイ先近辺で他の参加者と遊ぶことは可能。 昼休みが長いため、サッカーをしている学生もいた。 週末は火山でのハイキングやラフティングが2回分プログラムにあらかじめ組み込まれている。それ以外の週末は各自現地での旅行が企画されていた。 平日も時々近くのバーやクラブに行くこともあった。
派遣先大学の環境について ①参加学生へのサポート体制(語学面・学習面・生活面・精神面でのサポート等) ももとのサポート体制はあまり充実していないと思われるが、自分から積極的に頼みに行ったり交渉したりすることで、調整可能だった。 ②大学の設備(図書館・スポーツ施設・食堂・PC 環境等) 不自由は全くなかった。だが、国連平和大学の設備は、東京大学や日本の国連大学と比べて圧倒的に簡素だった。
プログラムを振り返って ①プログラムの意義、参加を通じて成長したこと、その他留学を通じての所感 私は、ネイティブに囲まれてもまれたかったので、6 週間という短期間の割には、語学面の成長を期待以上に感じられた。また、年上の参加者が多かったため、参加者との交流を通して将来に関しての考え方にも変化が起きた。 ②参加後の予定 就職活動 ③今後参加を考えている学生へのメッセージ・アドバイス 様々な国出身の海外の学生と触れ合いたいのであれば、他の IARU プログラムの方が充実しているとは思いますが、アメリカの学生と触れたいとか、アメリカの大学や大学院留学を考えているのであれば、本プログラムはおすすめだと思う。 平和構築や人間の安全保障について学ぶという側面に関しては、学習のほとんどが基礎レベルであり、座学・Reading を通してだったように感じられるので、それを踏まえた上で検討が必要だと思う。
その他 ①準備段階や留学中に役に立ったウェブサイト・出版物 日本のガイドブックよりも Lonely Planet の出版している Costa Rica のガイドブックの方が役に立つのではないかと思います。 ②その他東京大学のホームページ・出版物等に掲載してよい留学中の写真があれば添付してください。